

## 谷崎潤一郎

——大正七年の中国旅行

谷崎潤一郎は、中国を二度訪れており、そのうち一度目の大正七年の旅行については、以下の文章に書き残している。

「支那旅行」(大8・2)、「南京夫子廟」(大8・2)、「蘇州紀行」(大8・2)、「秦淮の夜」(大8・2)、「支那劇を観る記」(大8・6)、「支那の料理」(大8・10)、「或る漂泊者の俳」(大8・11)、「廬山日記」(大10・9)、「奉天時代の空太郎氏」(昭21・10)、「朝鮮雜感」(初出未詳)

中国旅行は、谷崎の生涯で唯一の海外旅行であり、谷崎の中国趣味を知るうえでも重要な事実であると考えられるが、まだ、その詳細は明らかにされていない。そこで、まず、大正七年の旅行に注目し、その出発までの経緯を見るとともに、右記の文章を参考に、この旅行の行程を明らかにしたい。

## 馬場 夕美子

大正七年十月九日から約二か月、谷崎は中国を旅行する。その出発日の東京駅での谷崎の様子<sup>1</sup>が、新聞に「谷崎潤一郎氏の支那行き」と題し、夫人令嬢を伴った写真とともに報じられている。その記事の中に、「例の末日会の文士連が小村侯の話から思ひ付いて支那へお揃ひで出掛ける話だったが谷崎潤一郎君だけ」立つことになつたと記されており、谷崎の中国旅行の直接のきっかけが末日会にあつたと考えられる。同時に、谷崎が末日会の会員であつたこと、「例の」という言葉から、末日会が当時、新聞を賑わしていたことなども推測し得る。

末日会は、「政治家も、実業家も、官吏も、文士も一緒の会合」で、大正七年の一月三十一日に「鴻之巢」<sup>2</sup>で初めて開かれた。幹事

に「代議士尾崎敬義、政論家大山郁夫、文学者有島武郎、田中純」<sup>③</sup>がなり、「其の後、三、五、七の隔月に毎回新橋駅楼上の東洋軒」で会合を開き、八月以降は毎月開会となった。<sup>④</sup>

小村侯とは小村欣一<sup>⑤</sup>のことで、文学及び芸術、その中でも特に劇を好んだ人物であった。小村侯は、三月の第二回会合から末日会に加わったのだが、「此の政治家、文学者の提携に多大の興味を見出し、自ら入会を申し込んだ程の熱心家」<sup>⑥</sup>であったようだ。そして、末日会のみならず、大正八年一月には、田中純、吉井勇らとともに国民文芸会をも旗揚げしている。<sup>⑦</sup>

田中純によると、その頃は、「懇話会や晚餐会が絶えず何処かで開かれて」おり、「文壇外の人たち、政治家や実業家や劇場人の主催するようなものも相当に多かった」<sup>⑧</sup>。後藤新平男爵の文士招待会<sup>⑨</sup>、国民文芸会、末日会などがそれにあたり、田中はこの三つの会合のすべてにおいて幹事のような役割を担っていた。<sup>⑩</sup>その田中が末日会について語った、大正七年八月十一日の新聞記事には、

毎回出席されて居る人は尾崎敬義、小村欣一、植原悦二郎、鶴見祐輔、若宮卯之助、田中王堂、大山郁夫、吉井勇、阿部次郎、岩野泡鳴、生田長江、有島武郎、同生馬、里見弾、長田秀雄、同幹彦、室伏高信、与謝野寛、同晶子<sup>⑪</sup>

とあり、谷崎の名前は出ていない。しかし、末日会の会員が、各自

の「知人を推挙」<sup>⑫</sup>する形で集められていたことと、この会員の顔をれを考え合わせれば、会の発起者である田中自身、谷崎とは知り合<sup>⑬</sup>いであつたし、谷崎もそこに加わっていたと考えるのは決して無理なことはない。

末日会の中で中国旅行の話が出ていたのも事実で、それは大正七年九月十七日の「文士連の支那漫遊——小村侯の肝煎で末日会の青年作家連が早晚実行する事になる」という記事に見られる。それによると、「末日会なんてあんなに、加減な文士と政治家の集団に何<sup>⑭</sup>が出来るもんか」とまで酷評され「ていたらしいが、会の「今後の発展を画策してゐるその第一着手として最近会員の三四が支那漫遊を敢行し支那といふものを文学を出発点とする政治的見地から視察して会合の趣旨を明らかにし」ようと<sup>⑮</sup>する企画が起り、小村侯が「支那課長」になつたという。政治家連が経済的な援助を買って出るだの、「中日事業」を視察するだの、案は出ていた<sup>⑯</sup>ようだが、実現されたかどうかは定かではない。ともかくも、この「青年作家連」の中に谷崎がいたということを、前掲の記事、「谷崎潤一郎氏の支那行き」は指し示していると考えられる。

しかし、結局、谷崎は自費での一人旅を行った。谷崎はこの旅行について、「ナーニ、遊びに出掛けるんです」<sup>⑰</sup>と語っている。政治嫌いの谷崎にとつては、末日会から離れた旅行の方が望ましかった

のかもしれない。末日会の内容から考えて、谷崎がこの会に魅力を感じていたとは考えにくい。そこが、末日会と谷崎を直接結び付ける資料が見つからない原因だろう。つまり、谷崎の不熱心さを表しているのだ。だが、谷崎の中国旅行が末日会と関わりを持っていたということは、今まであげてきた根拠により、言えるのではないだろうか。

一方で、谷崎の中国旅行が佐藤春夫の発案によるものだとと言える根拠もある。それは、佐藤自身が『支那雑記』（昭16・10・18、大道書房）の中で語っている。「二十数年前、大陸旅行の趣味と必要を言ひ出したのも自分であつた。谷崎が先づ、次いで芥川が行つたのも自分の発案に促されたのであつた」<sup>15</sup>。そして、大正七年七月二十日付「よみうり抄」には「谷崎潤一郎氏は佐藤春夫氏と共に今秋支那を漫遊する心組なる由」<sup>17</sup>と記されている。

このことから、谷崎の中国行き準備が、七月頃から既に始まっていたこともわかる。大正七年七月九日には、「谷崎潤一郎氏今秋九月下旬出発支那に赴く可く目下其準備に着手中」<sup>18</sup>とあり、八月十二日には、「目下上京中尚ほ来月廿日頃出発先づ満州に赴き南清まで歴遊する心組なりと」<sup>19</sup>とある。七月に既に中国旅行の予定が立っているところを見ると、末日会なら五月例会で話が出ていたことにもなる。そして、出発日が当初の予定より遅れて十月九日に落ち

着いたことも知ることができる。

九月十七日に、「目下上京中の氏は芝愛宕下町青木旅館に逗留中」<sup>20</sup>とあるように、九月にはいると、谷崎は沢田卓爾の世話で、彼の下宿「青木」の一室に泊まり込むようになる。「新聞記者や無用な客を避け」<sup>21</sup>るため、「蛸殻町の実家では支度がしにくいから」<sup>22</sup>と、わざと「一カ月余り止宿していた」<sup>23</sup>ようだが、その間、沢田や佐藤春夫を引き連れて、連日浅草へ通っていたようだ。「支那へ行こうとしているときでもあるし、しようと思えば前借りもできる」<sup>24</sup>谷崎はお金があつたので、「渡支の支度をする」と称して<sup>25</sup>「家庭から離れ、二人を連れて遊び歩いていた。佐藤春夫に宛て、大正七年九月（推定）十二日に「先日は失礼、明十三日は多少の雨天であつても、芝居へ行くつもりです。江口氏を誘つて四時ごろまでに上山方へ入らつしやい。」と葉書を出しているのも、この頃の状況を物語っているのではないだろうか。

江口渙によると、「谷崎は旅費を作るために中央公論や新小説からずいぶん原稿料の前借りをしたようだ。それでも足りなくなつて、春陽堂へ自分の小説の版權まで売っている。番頭が止めたにもかかわらず、「きみの方で新小説の前借をぼくの要求どおりにさせないんだから、版權を売るよりほかに金の作りようがないじゃないか」と言つて、「本で二冊分ぐらい」を売り払ってしまったらしい」<sup>26</sup>。

帰国後、大正八年には、「中央公論」に四回、「新小説」に三回、寄稿している。<sup>27)</sup>

そのような中で、谷崎の中国行きを批判するかのような文章を、大正七年九月二十九日、近松秋江が寄せている。

この頃文壇の一部では支那に遊ぶといふことが、屢話題になつてゐるさうである。結構なこと、思ふ。

乍併支那に行つて来たといふことを、自己の文名の広告に用ゆる心ならば、別問題。又此の頃一派の月評家によつて、頻りに担がれてゐる荒唐無稽なるロマンチック小説や時代錯誤時代錯誤の夢幻的小説の種題蒐集に出掛けるといふのならば吾々に取つては真面目になつて兎角云ふべき問題ではない。<sup>28)</sup>

「この頃文壇の一部では支那に遊ぶといふことが、屢話題になつてゐる」といふのは、末日会のことを指しており、「荒唐無稽なるロマンチック小説や時代錯誤時代錯誤の夢幻的小説」といふのは、谷崎の作品を指しているのではないだろうか。例えば、「人魚の嘆き」(大6・1)や、「魔術師」(大6・1)、「人面疽」(大7・3)、「白昼鬼語」(大7・6)など。

秋江は、大正七年八月に発表した「ロマンテック小説を排す」の中でも「荒唐無稽なるロマンチックの作品や夢幻的なる歴史小説」といふ言葉を使つてゐるが、そこでも直接谷崎の作品をあげてはい

ない。しかし、秋江はよく、谷崎のことを「ローマンチスト」<sup>29)</sup>であると評しているし、「ロマンテック小説を排す」に反論し、「ロマンテック小説を賛す」を書いた高須梅溪は、その中で「谷崎潤一郎氏などの、ロマンチックな作品」<sup>30)</sup>と明示している。これらのことから秋江が言下に批評の対象としたものの中には、谷崎の作品も含まれていたと考えるのが至当であろう。秋江は、このような作品の「種題蒐集」のためにする「支那漫遊が文芸家が文芸の側に立つて古今の文明を批評し、過現の人間生活を批評する意味に於て果してどれだけの効果を齎すか、頗る疑問である」、そういうのは「真の意味にいふ文芸の正統なる發達を妨げるくらゐのものであらう」と述べている。

さらに、秋江の言うところを要約すると以下のようである。「真面目なる意味に於て支那の古代文明を觀察しようといふのが目的であるならば、「ゆく前に先づ十分の知識を準備せねばならぬ」。中国の「古代文明」だけでなく、「日本の古代文明の性質を尚ほく知らねばならぬ」。現時点では、それだけの準備をできてゐる者がいるとは思えないから、「まだく支那を見に行くには時期が早い」、行つても無駄だ。

尤も、どうせ文士連のことであるから、仮りに支那に遊びに行くとしても、全く文字どほりの遊びであつて、到る処の租界

や支那人街でいろんな酒を飲んだり、脂つ濃い支那料理を食ったり、玉肌滑かな売笑婦に変わった味を求めたりして、日本に帰って来て月尾会などでその通を誇るのが目的であるといふのならば、兎角云ふ限りにあらず。<sup>32)</sup>

と皮肉たっぷり述べている。この「月尾会」とは、末日会を指しているのではないだろうか。

中国旅行の目的として、末日会は中国を「政治的見地から視察」<sup>33)</sup>することをあげ、秋江は、文芸のための旅行なら「十分の知識を準備」<sup>34)</sup>した上で、中国の「古代文明を視察」することが必要不可欠であると説いた。それらに對し、中国へ「遊びに出掛ける」と語った<sup>35)</sup>谷崎は、確かに、秋江の言う「文字どほりの遊び」を行ったし、旅行前から楽しみにもしていた。中国料理に関しては、帰国後発表された「支那の料理」をはじめとするエッセイや、「秦淮の夜」などの作品から、その執着ぶりが窺えるし、また、中国の女性と交渉をもつところも「秦淮の夜」に描かれている。このことに關しては、久米正雄が、旅支度をしている谷崎から、「なかにサックがいつぱいつまっている」「MCCの箱を開けて見せ」られ、帰国後には、「上海だか南京だかで、ある晩女を買った」という土産話も聞かされた、<sup>36)</sup>という話が残っている。

ともかくも、十月の七日には、「午後六時から『鴻の巣』」で谷崎

の「渡支を送る可く佐藤春夫、上山草人の両氏発起の下に送別会が」<sup>37)</sup>開かれたようであるし、沢田は谷崎の「荷作りをしてや」<sup>38)</sup>り、谷崎はやつと「九日東京駅を出発支那旅行の途に就いた」<sup>39)</sup>のであった。

## 一一

この約二か月の中国旅行の間、谷崎は「鉄道院のガイドブックと地図とに拠つて」行動していたと「蘇州紀行」に書いている。それは、大正二年から六年までの間に、鉄道院が発刊した英文ガイドブック『AN OFFICIAL GUIDE TO EASTERN ASIA』を指していると考えられる。このガイドブックは、VOL. I MANCHURIA & CHOSEN (大2・10・1) VOL. II SOUTH-WESTERN JAPAN (大3・7・1) VOL. III NORTH-EASTERN JAPAN (大3・7・1) VOL. IV CHINA (大4・4・3) VOL. V EAST INDIES (大6・4・1)の全五巻で、欧米人向けに出版された東洋観光案内である。内容は、交通、観光、宿泊施設、公共施設の案内から、言語、風俗、芸術、歴史、産業の解説に至るまで、かなり豊富である。縦16cm、横11cm、厚さ3cmほどの携帯可能な大きさで、谷崎はこれらのうちVOL. IとVOL. IVを携えて行ったと考えられる。

大正八年には、同じく鉄道院の編纂により、『朝鮮満州支那案内』(大8・10・1、鉄道院)が日本人向けに発刊される。その諸言には、

英文東亜案内書に依て得たる経験は之を邦文に翻して尚且同様の成果あるべきを思はしむると共に、近時本邦内地と鮮満支那方面との交通益々密接なるに連れ、該方面に対する案内書の必要愈々急ならむとするの趨勢あり。乃ち本書は此の要求に応ずべく此に其の首途第一歩を試むるものにして、書中載する所は朝鮮、満州、支那各地に亘り、記事の内容より附図挿画等に至るまで凡て我英文 Official Guide のそれと同程度

であると記されている。つまり、大正八年以前には、鉄道院による日本語東亜ガイドブックは出されていなかったことがわかるので、谷崎が使用したガイドブックが英書であったと言えるのである。<sup>④</sup>

しかし、ここでは、谷崎の旅行の足取りを明確にするために、主に大正八年版『朝鮮満州支那案内』の記述を参考にした。谷崎が実際に使用したガイドブックは、『AN OFFICIAL GUIDE TO EASTERN ASIA』の VOL. I と VOL. IV であると考えられるが、大正七年の中国での谷崎の足取りを追うには、大正二年と四年に発行されたこれらのガイドブックより、大正六年から七年にかけて調査が行われた<sup>⑤</sup>、八年版のガイドブックを用いる方が適当と判断でき

るからである。

旅行後発表された「支那旅行」によると、谷崎の中国旅行の

途中の行程は、朝鮮から満州を経て北京へ出、北京から汽車で漢口へ来て、漢口から揚子江を下り、九江へ寄つてそれから廬山へ登り、又九江へ戻つて、此度は南京から蘇州、蘇州から上海へ行き、上海から杭州へ行つて再び上海へ戻り、日本へ帰つて来た様な順序である。(「支那旅行」)

この行程は、徳富蘇峰が大正六年の中国旅行の際にとったルートと似ている。

蘇峰は、谷崎の旅行のちょうど一年前の同じ時期、大正六年九月十五日から十二月九日の三か月間に中国を旅しており、朝鮮、満州を経て、中国を北から南へ渡る行程を踏んでいる。そして、この旅行の記録をまとめて、大正七年六月に『支那漫遊記』(大7・6・25、民友社)として刊行している。谷崎は、『蘇州紀行前書』(大8・2)に「徳富蘇峰氏を始めいろいろの人の紀行文や談話」を読んだと記しているので、この『支那漫遊記』を読み、自身の旅行の参考にしたのではないかと考えられる。

大正七年十月「九日午後四時の汽車で東京駅を立つた」<sup>⑥</sup>谷崎は、「二た晩の間汽車と船とに揺られ」、「対馬海峡を夜の間に越へて釜山の港へ」到着いたと「朝鮮雜感」に書いている。「朝鮮満州支那

案内」によると、「毎日朝夕二回の東京下関間直通急行列車便（九州よりする場合亦相当接続列車便）を以て先ず下関に至り、同処より関釜連絡船に搭乗すれば約十一時間にして釜山埠頭に達す」とあり、さらに、当時の時刻表を見ると、東京駅を午後四時ちょうどに出発し、下関に翌日の午後八時二十四分に到着する急行列車があり、それに接続する形で午後九時半に下関を船が出発し、翌朝の九時に釜山に到着するとなつてゐる。つまり、谷崎はこの時刻に、このルートで釜山へ渡つたと考えられるのである。蘇峰も、東京を出発して翌日下関に至り、その日の晩から翌朝にかけて関釜連絡船で釜山へ渡つてゐる。<sup>45</sup>

十一日朝、釜山へ着いた谷崎は、それから京城へ移動する。『朝鮮満州支那案内』には、釜山京城間の「朝夕二回の急行列車は関釜連絡船に接続し」、所要時間は「八時間乃至十時間」、朝の急行列車は「埠頭棧橋よりの直通にて、汽船との接続上最便利」と記されてゐる。時刻表を見ると、前記午前九時釜山着のつづきに、午前十時半棧橋発、同日午後六時二十六分南大門（京城）着の急行列車がある。<sup>47</sup> 谷崎は、「朝鮮雜感」を始め、旅行後発表した他の中国関連の作品の中でも釜山の街の様子に触れていないので、接続の便を生かして、釜山の街を見ずに、すぐ京城へ移動したのではないだろうか。

谷崎は、京城から奉天、天津、北京、漢口、武昌、九江、廬山、

南京、蘇州、上海、杭州を訪れ、上海から帰国する。これらの土地をこの順序で訪れたことは、前に掲げた「支那旅行」の記述と、他の中国旅行に取材した作品の中の記述からわかる。これは、徳富蘇峰の旅行のルートを縮小したような形になっているし、これらの土地を北から南にまわるには、この順序で鉄道、船を利用していくのが最も無駄がないとガイドブック等から判断できるので、谷崎のこの記述に間違いはないと考えられる。

しかし、注意して作品を見ても、日付だけがひどく混乱していることに気づく。訪れた場所の名前や位置は、細かいところまで大方正確に記されていると、ガイドブックや地図から確認できるが、日程については全くつじつまが合わない。

まず、谷崎が「朝鮮から始めて満州の領土に這入つて、奉天の下李太郎氏の家に落ち着」いたことは、李太郎が、大正七年十月十八日「谷崎卜城内ニユク」、十九日「午後谷崎山下ト北陵ニユク」と日記に記していることから確認できる。谷崎の方では、李太郎が亡くなった昭和二十一年、「奉天時代の李太郎氏」の中で、奉天滞在時期を「大正七年の十一月中旬」と記しているが、これは十月の間違いだろう。同様に、東京出発を「同月上旬」としているのも、ひと月早められなくてはならない。「支那旅行」では、「十月の九日に東京を出発した」と新聞記事と一致する記述を残している。また、

谷崎は「奉天時代の空太郎氏」に、「空太郎君の家に十日ばかり泊めて貰つ」たとも書いている。

次に訪れた天津については、「或る漂泊者の傍」に書いてある。この作品では、「私」が或る男の後に付いて天津の街を歩く様子を描いており、その描写はほぼガイドブックの記載事項と一致し、道筋もたどることができる。つまり、谷崎自身がこの道筋を実際に歩き、見たものを作品に描いたと考えられるのである。このことは、「新小説」掲載時にこの作品に付けられていた(A Sketch)という副題からも窺うことができる。

そして、この作品の冒頭には次のように記されている。「それは去年の今頃——十月二十五日の午後二時分のことである」。奉天に十月十八日と十九日を含む十日間滞在していたとすると、十月二十五日は谷崎が実際に天津に滞在したと考えても、うまく当てはまる。次に、天津から北京へ移動する。十一月十四日付「よみうり抄」には「谷崎潤一郎氏は目下北京に在り」<sup>⑤</sup>と載っており、谷崎自身の記述によると、北京滞在は「前後十日ばかり」<sup>⑥</sup>となっている。しかし、「廬山日記」で谷崎は、廬山観光を十一月十日から十二日までの三日間としている。ここで、あとの二日間を「十月」と記しているのは、単なる書き間違いであろう。そして、さらに、十一月十日は「北京を発してより実に一週間目」にあたると記している。この

谷崎の記述を正しいとし、「よみうり抄」に時間のずれがあるとすれば、それは十日以上のずれということになってしまう。そして、場所を確定することはできないが、十一月十九日に「目下南支那長江筋を巡遊中」<sup>⑦</sup>と報じた「文芸消息」の記事もある。

廬山から九江へ戻って、揚子江を船で下り南京へ向かう。「支那旅行」によると、谷崎が「南京へ行つたのは恰度十月の二十日頃」である。また、「秦淮の夜」が初めて「中外」に掲載されたときには、「左に掲ぐるは南京紀行の一節にして、十月二十日の夜のことなり」<sup>⑧</sup>と冒頭に記されていた。この二作は同じ大正八年の二月に発表されたもので、並行して書かれたことにより、記述が一致しているのだろう。しかし、日程的に、十一月二十日ならばうまくおさまるが、十月では全く当てはまらないのである。「支那旅行」では、東京出発日を十月九日と書き、ルートも示しながら、南京滞在を十月二十日としているが、その記述には無理があると考えられる。

同じように、大正八年二月に書かれた「蘇州紀行前書」では、「私が蘇州に遊んだのは昨年の秋、十月の二十二、二十三、二十四、二十五の前後四日間であつた」、二十二日の「午前中に南京を発し」と記している。これも、十一月なら当てはまるが、十月では全く日程が合わないのである。十月二十五日といえば、「或る漂泊者の



「佛」に記された天津滞在日にあたる。なお、「文芸消息」で「目下蘇州に滞在中<sup>53</sup>」と書かれたのは、十二月四日のことであり、ここでも、蘇州滞在を十一月二十二日からの四日間とした場合、新聞記事に十日間ほどの遅れがあることになる。

上海、杭州を訪れた後、上海から帰国するが、このあたりの谷崎による日程の記録はない。「文芸消息」および「よみうり抄」では、十一月十四日、「来月中旬迄支那漫遊旅行を続ぐべし<sup>54</sup>」、十一月十九日、「来月二日頃帰朝の予定<sup>55</sup>」、十二月四日、「杭州に数日を費やし上海を経て来る十日頃帰朝の積<sup>56</sup>」と報じられており、また、十二月十七日には「帝国ホテル新館一二番に投宿今次支那旅行を背景に長編小説の脱稿を急ぎつ、あり<sup>57</sup>」と記されている。

しかし、間もなく父親が病に倒れたことで、谷崎は余裕のない生活を送ることになったようだ。「秦淮の夜」では、「父の病気の為に自ら筆を執る能はずして、已むを得ず筆記生を煩はし忽卒の際に口授したるものとす。読者此れを諒せよ<sup>58</sup>」と断り、「蘇州紀行前書」でも同じように、

父が病気に罹つたために騒騒しい日本橋の家へ看病がてら来て居るので、到底落ち着いて原稿を書く事が出来ない。そこで已むなく病室の二階に寝転びながら、時々隙を見ては筆記生に口授してやつとこれだけ書き上げたのである

と書いている。これらの作品は、同じ大正八年の一月に、全体の約半分が執筆された。残りの半分は翌月に、「蘇州紀行」は「画舫記」と名を変えて、同じ「中央公論」に、「秦淮の夜」は「南京奇望街」と名を変えて、前者は「中外」に発表されたが、後者は「新小説」に発表された。後半部が掲載されるにあたって、続稿であることを特記し、特に「南京奇望街」発表時には、前回は「締切に間に合はなかつた、めに妙な所で切つてしまつた<sup>59</sup>」と断り書きをしている。また、「画舫記」では追記として、「父の重病と云ふ事情が未だ取り除かれぬために、蘇州の美しさを茲に充分に紹介する余裕のない<sup>60</sup>」ことを断っている。

これらのことから、この時期、谷崎が忙しさに混乱しているような様子が窺えるだろう。そのような状況で、十月と十一月の間違いなど気にする余裕はなかつたのかもしれない。

以上のことから推測して、旅行の行程をまとめてみると次のようになる。下二段のうち、上段は谷崎の記述によるもの、下段は新聞記事によるものである。

年月日	地名	谷崎	新聞
大正七年 十月 九日	東京	十月九日	十月九日
		十一月上旬	

十二月十七日	帝 国 ホ テ ル		
十二月中旬	(婦 国) 上 海		
	杭 州		
	上 海		
	蘇 州		
	南 京		
	廬 山		
十一月 十日 十一月 十二日	九 江	十一月十日 十一月十一日 十二月 十二日	十一月十九日 (長江筋)
(一週間)	武 昌		
	漢 口		
	北 京		
二十五日 (十日間)	天 津	十月二十五日 (十日間)	十一月十四日
	奉 天		
	京 城		
	釜 山		
	下 関		
		十一月中旬 (十日間)	

この二か月の旅行中、谷崎は常に単独で行動していたわけではない。木下李太郎の他にも、数名の中国在住日本人の世話になっている。

「支那劇を観る記」によると、北京では「劇通を以て有名な辻さんや、同文書院出身の村田孜郎君や、平田泰吉君などに説明を聞いたり案内をして貰ったりし」ている。当時「劇通を以て有名な辻さん」といえば、辻聴花がいた。井上紅梅も『支那風俗』(大10・4・25、日本堂書店)の中で、「北京の劇通辻聴花氏」と記し、芥川龍之介も大正十年の中国旅行の際、北京の劇場で聴花の世話になり、その後発表した紀行『支那游記』(大14・11・3、改造社)に、「外国人にして北京に劇通たるものは前にも後にも聴花散人一人に止めを刺さざるべからず」と記している。このことから、谷崎の言う「辻さん」も、聴花であると考えて間違いないだろう。聴花は当時北京の順天時報社に勤めており、「中国劇の研究に没頭し、その劇評は斯界の権威として南北中国に重きをなし」たほどで、芥川も「先生が劇通中の劇通たるは支那の役者にも先生を拜して父と做すもの多きを見て知るべし」と書いている。

同文書院とは、言うまでもなく「東亜同文会が中国に開設した学校」、東亜同文書院のことであり、当時は上海にあった。「日清両国の学生を收容し、日本の学生には清国語を」学ばせ、「両国学生の

親睦友誼を図り、将来提携の基礎を作ることを目的としていた。

「日本からの留学生については、各府県から公費をもって、二、三名以上を派遣する方法を」とっていた。<sup>65</sup> 村田孜郎はその出身で、後に大阪毎日新聞社に入社し、芥川が大正十年に社命を受けて中国旅行に出たとき、案内者として同行している。芥川の『支那遊記』にはよく名前が出る「中国語に堪能で中国紹介の著書も多い」人物である。平田泰吉については、『支那在留邦人人名録』（十一版 大9・6・26、金風社）に、東方通信社北京支局の社員として名前が載っている。

九江、廬山では、「田中氏」と「太田氏」の案内で観光していたことが「廬山日記」からわかる。「太田氏」については不明であるが、「田中氏」とは以下の田中純の文章から、田中純の兄であると判断できる。

谷崎氏が支那にたつときに、ぼくは当時九江に住んでいた僕の次兄の家に立ち寄るようにすすめ、兄へも谷崎氏が立ち寄るかも知れない旨の手紙を書いてやった。谷崎氏は廬山地方に遊んだときにこのことを思い出し、兄の家を訪ねて呉れたのである。<sup>66</sup>

また、上海では、一中時代からの友人である土屋計左右の下宿に泊めてもらっている。土屋は当時、三井銀行上海支店に勤めており、「文路の日本人倶楽部五階に」住んでいた。土屋は谷崎に、「旅費を

節約しよう」「同居を勧めた」らしい。土屋によると、谷崎は「在留邦人中の文学青年達が支那芝居等に案内して居たが、また単身で精力的に方々の夜を探検していた」<sup>70</sup> ようである。

日本が英国、仏国とともに中国に進出していた大正七年当時においては、中国で生活を営む日本人も相当に多かつたようだ。谷崎は、単独での初めての中国旅行で、中国在住の日本人の知人や新聞関係者などを頼りに、二か月にわたる旅行の便を図ったようである。

日本国内で、政治経済界においても、文壇においても、中国に対する関心が高まる中、それに乗じるように中国へ渡った谷崎であった。知人を頼りつつ、中国を北から南へ訪れた谷崎は、帰国後、その様子を書きとどめたものを数編発表した<sup>71</sup>が、それらは断片的であり、必ずしも旅行の全容を明らかにするものではない。しかし、そのような断片の中にこそ、「支那趣味と云ふこと」（大11・1）で、「特に誘惑を感じるだけ、尚更恐れて居る」と語った、谷崎の中国に対する思いがあらわれている。本稿では、この谷崎の中国趣味を究明するための一端として旅行に着目し、整理を試みたが、まだ、詳しく旅行の内容や、作品への影響を解明するに至っていない。今後、これらを検証することが谷崎の文学を読み解くうえで重要であると考えられる。

注

- ① 「谷崎潤一郎氏の支那行き」(「大阪朝日新聞」大7・10・12)
- ② 「文芸家の集まり(其四) 末日会」(「読売新聞」大7・8・11)
- ③ 「小村侯も出席する本月の末日会」(「時事新報」大7・3・29)
- ④ 注②に同じ。
- ⑤ 注②③に同じ。「華族略譜」(昭49・7・25、国書刊行会)、「現代華族譜要」(昭51・2・1、東京大学出版会)参照。また、田中純「お大尽貧乏見里彈」(「浅草人久保田万太郎」(「作家の横顔」昭30・7・10、朝日新聞社)、小林宗吉「小村欣一と文芸」(「文芸春秋」9―2、昭6・2)に、小村欣一が芝居好きであることが書かれている。小村欣一は、「新潮」の特集「社会批評家の現文壇に対する批判と要求」に「好事的閑事に非ず」(「新潮」31―1、大8・7)という文章を書いている。
- ⑥ 注②に同じ。
- ⑦ 田中純「浅草人久保田万太郎」(「作家の横顔」昭30・7・10、朝日新聞社)
- ⑧ 小林宗吉「小村欣一と文芸」(「文芸春秋」9―2、昭6・2・1)
- ⑨ 「久米正雄全集」第十三卷「年譜」(昭6・1・5、平凡社)
- ⑩ 田中純「序・あの頃の文壇」(「作家の横顔」昭30・7・10、朝日新聞社)
- ⑪ 三木生「新進作家の噂・寸鉄大臣の肺腑を貫く」(「文章倶楽部」3―10、大7・10)
- ⑫ 高須梅溪「あんらくいす・政治と文学の握手」(「時事新報」大7・8・18)
- ⑬ 「文士連の支那漫遊」(「東京日日新聞」大7・9・17)
- ⑭ 久米正雄「田中純氏の印象」(「久米正雄全集」第十三卷 昭6・1・5、平凡社)
- ⑮ 注②に同じ。
- ⑯ 注②に同じ。
- ⑰ 「文芸消息」(「時事新報」大7・2・21)の「田中純氏、昨日相州鶴沼に谷崎潤一郎氏を訪ねたが本日帰京の予定」という記事もある。
- ⑱ 「文士連の支那漫遊」——小村侯の肝煎りで末日会の青年作家連が早速実行する事になる」(「東京日日新聞」大7・9・17)
- ⑲ 注①に同じ。
- ⑳ 佐藤春夫「からの因縁」(「支那雜記」昭16・10・18、大道書房)
- ㉑ 「よみうり抄」(「読売新聞」大7・7・20)
- ㉒ 「文芸消息」(「時事新報」大7・7・9)
- ㉓ 「よみうり抄」(「読売新聞」大7・8・22)
- ㉔ 「文芸消息」(「時事新報」大7・9・17)
- ㉕ ⑲⑳ 沢田卓爾「谷崎潤一郎の思い出」(「文芸」4―11、昭40・10)
- ㉖ ㉑㉒ 沢田卓爾・伊藤整対談「荷風・潤一郎・春夫」(「群像」20―10、昭40・10)
- ㉗ 江口渙「谷崎潤一郎の思い出」(「谷崎潤一郎全集月報」4、昭42・2 中央公論社)
- ㉘ 「中央公論」……「蘇州紀行」(大8・2)、(「画舫記」(大8・3)、(「呪われた戯曲」(大8・5)、(「支那劇を観る記」(大8・6)
- ㉙ 「新小説」……「南京奇望街」(大8・2)、(「真夏の夜の恋」(大8・8)、(「或る漂泊者の佛」(大8・11)
- ㉚ 近松秋江「文芸偶感(2)」(大7・9)、「近松秋江全集」第十卷 平5・2・23、八木書店)
- ㉛ 近松秋江「ロマンテック小説を排す——「秘めたる恋」の作者へ」(大7・8)、「近松秋江全集」第十卷 平5・2・23、八木書店)
- ㉜ 近松秋江「新年雑感」(大4・1)、「潤一郎小剣」氏作品(大4・

2) (近松秋江全集) 第十卷 平5・2・23、八木書店)

③1 高須梅浜「ロマンチック小説を賛す」——秋江氏の偏見を難す(上)「時事新報」大7・9・3)

注②8に同じ。

③2 注②8に同じ。

③3 注②8に同じ。

③4 注②8に同じ。

③5 注①に同じ。

③6 注②6に同じ。

③7 「文芸消息」(「時事新報」大7・10・5) 注②2に同じ。

③8 「文芸消息」(「時事新報」大7・10・13)

③9 木村庄太「魔の宴」(昭25・5・30、朝日新聞社)に、谷崎が難なく英書を読みこなせたことが書かれている。

④0 「朝鮮満州支那案内」(大8・10・1、鉄道院)

注①に同じ。

④2 注①に同じ。

④3 注①に同じ。

④4 「公認汽車汽船旅行案内」第27号(大6・10・1、庚寅新誌社、交益社、博文館 三社合同)

「日本国有鉄道百年史」通史(昭49・3・1、日本国有鉄道)の年表によると、

大正六年五月二十三日 横浜線において広軌改築試験を実施

大正八年四月十日 地方鉄道法公布

となっており、大正七年には鉄道の改革は何も行われていない。よって、大正六年十月から大正七年十月までの間、時刻表の改正はないと判断し、これを使用した。

④5 徳富蘇峰「支那漫遊記」(大7・6・25、民友社)

④6 注④1に同じ。

④7 注④4に同じ。

④8 「木下李太郎日記」第二卷(昭55・1・31、岩波書店)

④9 「よみうり抄」(読売新聞)大7・11・14)

⑤0 「支那劇を観る記」(大8・6)

⑤1 「文芸消息」(「時事新報」大7・11・19)

⑤2 「秦淮の夜」(「中外」3—2、大8・2)

⑤3 「文芸消息」(「時事新報」大7・12・4)

注④9に同じ。

⑤5 注⑤1に同じ。

⑤6 注⑤3に同じ。

⑤7 「文芸消息」(「時事新報」大7・12・17) 注⑤2に同じ。

⑤9 「南京奇望街」(「新小説」24—3、大8・3)

⑥0 「画舫記」(「中央公論」34—3、大8・3)

⑥1 井上紅梅「芝居の研究(四)役と本・役柄について」(「支那風俗」巻中 大10・4・25、日本堂書店)

⑥2 芥川龍之介「北京日記抄 四・胡蝶夢」(「支那遊記」大14・11・3、改造社)

⑥3 「日本人名大事典(新撰大人名辞典)第四卷(昭12・12・20、平凡社)

注⑥2に同じ。

⑥5 「東亜同文書院大学史——創立八十周年記念誌」(第3編 東亜同文書院大学」(昭57・5・30、滬友会)

⑥6 「コンサイス日本人名事典」(平6・2・1)

⑥7 芥川龍之介「支那遊記」(大14・11・3、改造社)

⑧ 注⑥に同じ。

⑨ 田中純「谷崎潤一郎の胃袋」(『作家の横顔』昭30・7・10、朝日新聞社)

⑩ 土屋計左右「上海における谷崎君」(『谷崎潤一郎全集付録』29 昭34・7、中央公論社)

付記 本稿で引用した谷崎潤一郎の作品、書簡等は、特記したものを除き、『谷崎潤一郎全集』全三十巻(昭56・5・25)昭58・5・25、中央公論社)に拠った。原則として、旧字体は新字体に改めた。なお、地名は当時の呼称のままで記した。